

キャリアセンターが提供するキャリア教育科目の 効果測定(2)

—入門から応用へ—

立教大学社会学部 助教 瀬戸 健太郎

法政大学キャリアデザイン学部 教授 梅崎 修

法政大学キャリアデザイン学部 教授 田澤 実

1 問題設定

本稿の目的は大学のキャリアセンターが提供するキャリア教育科目について、(1) 複数回の受講はいかなる要因で規定されているのか、(2) 応用的な科目に関して、基礎科目から積み上げて受講することで、学生のキャリア意識に対して、いかなる効果が存在するのかを実証的に明らかにすることにある。また本稿は、瀬戸他(2023)で実証的に検討した、法政大学の「キャリアデザイン入門」の受講による、キャリアアクションビジョンテスト得点(CAVT得点)¹⁾の推移に関する研究を拡張したものであり、4時点のCAVT得点を収集した貴重な調査デザインを利用したものになる。キャリア教育科目受講が学生のキャリア意識を伸長させるという結果は、平尾(2019)が因果推論の枠組みを用いて実証的に明らかにしている。しかしながら一方で、大半の研究は1回のキャリア教育科目の受講で複数回、意識を測定することで、その効果を導き出そうとしており、キャリア教育科目の効果の持続性には、受講後の学生の行動への影響について検討する余地がある。また、より重要な点に、キャリア教育科目の受講に関してはセルフセレクションが作用してい

る可能性は大きい。そこで、本稿では、2回のキャリア教育科目受講が行われるという条件を利用して、このようなキャリア教育科目受講に関するセルフセレクションの一端を明らかにする。もう一つは、従来の研究では1回のキャリア教育科目の受講により、キャリア意識や内定獲得に有効であったかが言及されるが、射程を拡大して、「複数回のキャリア教育科目受講の効果」を明らかにする。つまり、キャリア教育科目の受講の効果が線形の伸び方をしており、追加的な受講によりさらなる効果が見込めるのか、むしろ、追加的な効果といったものは乏しいのか、ということにアプローチする。

本研究の構成は次の通りである。2節で本研究の調査デザインと利用可能な分析手法の比較検討を行う。3節では、上述の2つの課題にそれぞれアプローチし、4節ではそれらの結果の含意について議論する

2 調査デザインと分析方法

(1) 調査デザイン

データの概要について述べる。本稿では、法政大学キャリアセンターによるキャリア教育科目の

「キャリアデザイン応用」の受講者データを扱う。同科目は瀬戸他（2023）で用いた「キャリアデザイン入門」の発展科目として、市ヶ谷キャンパスでのみ対面授業で開講されている科目である。カリキュラムは主に業界分析など、就職活動における必須スキルに関して、教授を行っている構成である。学部横断型で展開しており、1年生より受講可能であるほか、必ずしも、「キャリアデザイン入門」を受講していなくとも、「キャリアデザイン応用」から受講することも可能になっている。2022年度は対面形式を合わせて4科目設置されていた。

調査実施時期は第1回が、2022年10月下旬に、第2回が1月中旬であり、回答方法はオンラインでの回答フォームにより、受講者に質問紙を配布した。これに加えて、瀬戸他（2023）で利用した「キャリアデザイン入門」の受講者データを、学籍番号でマッチングして、4時点分のパネルデータとした。

ただし、前述の通り「キャリアデザイン入門」と「キャリアデザイン応用」はそれぞれ、独立に受講することが可能である。すなわち、一般的なパネルデータの課題である、脱落バイアスの発生のみならず、新規追加サンプルが「キャリアデザイン応用」から出現する、という問題もある。受講科目とデータ収集の条件分岐については、表1に示す。

表1 利用可能なデータの組み合わせ

パターン	キャリアデザイン入門 受講	キャリアデザイン応用 受講
1	○	○
2	○	×
3	×	○
4	×	×

これを見ると、本稿のような調査デザインだと3つの分析が可能になることがわかる。第一に、4時点でのCAVTの推移を傾きと切片に分解した実証分析である。これは、キャリア意識や行動の

「伸び」と「水準」を推定するアプローチである。

第二に、「キャリアデザイン入門」を受講しているが、「キャリアデザイン応用」を受講していない、という学生データを利用して、「継続的にキャリア教育科目を受講する要因」を実証的に明らかにするアプローチである。これは、パネルデータにおける脱落バイアスの推定を行うのと実証的には変わらない。このアプローチから、「キャリア教育科目の受講におけるセルフセレクション要因」の一部を推定できる。管見の限り、ほとんどのキャリア教育科目の効果検証に関する実証研究は、受講者データを利用して行っている。特に、必修科目ではない場合には、セルフセレクションによるバイアスの存在は大きいであろう。本稿は、瀬戸他（2023）のデータに「キャリアデザイン応用」の受講者データをマッチングできるため、「キャリアデザイン入門」受講時の成績やCAVT得点を利用することが可能である。つまり、キャリア教育科目受講において、セルフセレクション要因であると考えられる学生のキャリア意識を投入することが可能なのである。本稿の分析はそのような、セルフセレクションがどのようにして起きているかを探索的に明らかにできることがわかる。

第三に可能なアプローチは、「キャリアデザイン入門」の受講有無を処置・統制条件として、「キャリアデザイン応用」の受講者のCAVT得点から、2回のキャリア教育科目の受講の持つ効果推定を行うアプローチである。こちらも前述の通り、複数のキャリア教育科目の受講による、キャリア意識や行動の効果が累積的なものなのか、それとも科目受講後に効果は解消するため、一種の対症療法に過ぎないのか、といったことは必ずしも明らかにされていない。そこで本稿では、「複数のキャリア教育科目の受講は累積的な効果を有しているのか」といったことを実証的に明らかにする。

このように、分析課題に応じて用いるデータセットが複数存在する。結論から言えば、本稿では第二と第三のアプローチについてのみ実証的に検証する。第一のアプローチを行うには、著しく

サンプル脱落が多く、「キャリアデザイン入門」からの継続率を計算すると、20%にも満たないためである。もちろん、脱落確率を補正してアプローチすることもできるが、調査の制約上、脱落確率を補正するための変数が非常に限定されているという問題点もあることから、本稿では4時点でのキャリア意識の推移は今後の課題とし、第二と第三のアプローチについて実証的に検証する。

（2）分析方法

分析方法について述べる。第二のアプローチと第三のアプローチで用いる分析はそれぞれ、若干異なるが、第二のアプローチでは、脱落確率の推定を行う。手順はまず、法政大学の学部×男女比率からクロスセクション用ウェイトを作成し、ウェイトで重み付けした二項プロビットモデルを行って「誰が継続的にキャリア教育科目を受講するのか」を推定する。今回のアプローチでは「キャリアデザイン入門」の2時点データを利用することができるため、「キャリアデザイン入門」受講前後のキャリア意識などのデータも用いることで、キャリア意識の「水準」と「変化率」も考慮した、学生の受講行動の推定を行うことができる点で、より発展的な分析が実行可能である。例えば、継続受講者ほど真面目な学生であり、早くからキャリア意識が高いといった、なんらかの想定に基づく学生像を実証的に検証することができる。このような想定は、同一講義内での2時点の推定であれば概ね正しいと考えられる一方で、学期をまたいだ別科目の受講であれば、開講キャンパスや必修科目の有無など、制度的な要因のほかにも、受講者の意識の変化などセルフセレクションが働くことは想像に難くない。限られた変数からのアプローチになるが、本稿ではこのような、学期をまたいだ継続受講について、明らかにする。

第三のアプローチに関しては、「キャリアデザイン入門」の受講有無を条件にした平均値の推移を計算することができる。もちろん、精緻な効果推定を行うのであれば、「キャリアデザイン入門」の受講有無を確率的に推定した傾向スコアマッチ

ングを用いる方が妥当である。例えば、宮田(2020)では傾向スコアを用いて、キャリア教育の効果推定を行っている。本稿の場合では、調査の制約上、「キャリアデザイン応用」から受講を始めた学生の変数が十分に入手することができない。「キャリアデザイン入門」を受講していないため、CAVT得点という、受講有無を決定づけるであろう重要な変数が手に入らないのである。もちろん、宮田(2020)のように、性別や学年、学部、入試形態といった最低限の変数で処置群と統制群をプロビットモデルで推定する、ということも可能であろう。しかしながら、キャリア教育科目の受講有無の意思決定に対して、これらの変数を用いるのには妥当かは留保が必要だろう。そこで、曖昧な条件の下での因果推論を行うよりも、これまで先行研究で十分に行われていない、キャリア教育科目の累積的な影響を記述的ながらも行うことを優先してアプローチする。したがって、第三のアプローチでは、「キャリアデザイン応用」受講者だけの脱落確率の逆確率を用いて補正した上で、CAVT得点の平均的な推移を確認する、という比較的珍しい環境での結果を記述的に確認していく²⁾。講義は2022年度に行われているため、学部別の男女比率の情報は法政大学後援会(2022)から取得し、2022年度5月1日現在のデータを利用したものと、本稿のデータとを組み合わせ、ウェイトの作成を行った。この際、「性別その他」はケース数が少ないため除外した。なお、第二のアプローチ、第三のアプローチそれぞれ異なるデータセットを作成することから、それぞれのデータセットで都度、ウェイトは作成し直して分析を行った。したがって、データセットごとにウェイト値はそれぞれ異なるものを利用した。

3 分析結果

（1）「キャリアデザイン応用」の受講有無の推定

表2は、「キャリアデザイン応用」の受講有無の推定に用いた変数の基本統計量である。「キャリアデザイン応用」におけるCAVT得点の無回

表2 基本統計量³⁾

	平均値	標準偏差	N		平均値	標準偏差	N		平均値	標準偏差	N
継続受講	0.150	-	2583	経営学部	0.113	-	2583	キャリアデザイン 入門成績	3.070	0.870	2583
男性	0.530	-	2583	経済学部	0.164	-	2583	2022年夏学期 GPA	2.690	0.680	2583
女性	0.470	-	2583	現代福祉学部	0.118	-	2583	キャリアデザイン 基礎受講後 アクション得点	21.230	5.020	1926
1年生	0.747	-	2583	国際文化学部	0.022	-	2583	キャリアデザイン 基礎受講後 ビジョン得点	20.580	5.490	1926
2年生	0.188	-	2583	社会学部	0.267	-	2583	受講前後アクション 得点変化率	1.110	0.320	1924
3年生	0.050	-	2583	人間環境学部	0.055	-	2583	受講前後ビジョン 得点変化率	1.170	0.400	1924
4年生	0.015	-	2583	文学部	0.059	-	2583				
キャリアデザイン学部	0.021	-	2583	法学部	0.080	-	2583				
スポーツ健康学部	0.013	-	2583	第一志望	0.565	-	2583				
グローバル教養学部	0.087	-	2583	第三志望以降	0.226	-	2583				
				第二志望	0.209	-	2583				

答を考慮せず、受講者データから受講有無を特定している。表2を見ると、「キャリアデザイン応用」の継続受講者割合は15%であることがわかる。

表3は主要な属性変数別にみた、「キャリアデザイン応用」の継続受講者割合のクロス集計表である。表3を見ればいくつか重要なことがわかる。第一に、学部別にみれば一見、なんらかの傾向がありそうに見えるが、その多くがキャンパス間距離で説明できるという点である。もちろん、葛城(2009)が言及するように、学部間でキャリア教育のニーズが異なる、という事情もあるだろう。しかし、そのような傾向は市ヶ谷キャンパスの学部に関してはあるかもしれないが、少なくとも多摩キャンパスの学部に関しては、対面授業でしか受講できないという制度的要因が非常に大きくなっている。同様なことは市ヶ谷キャンパスでも、秋学期必修科目の有無などが挙げられるだろう。当然ではあるが、そもそも継続受講に関しては制度的要因が非常に大きいことがわかる。

第二に、学年や性別での傾向の違いである。学年によっては、大きく継続受講率が異なることが

わかる。特に、学部2年生というインターン選考を翌年に控えた学年や、3年生というインターンや就職活動の直前の学年の継続率が低く出ている。これが法政大学の特有の現象なのか、一般的の傾向かはわからないが、いずれにせよ、学部1年生という最も、就職活動が到来するのが遅い学年の受講継続率が高くなっている。

「キャリアデザイン入門」の受講の成果とも言える、CAVT得点との「キャリアデザイン応用」受講有無との関係も確認しよう。表4は、「キャリアデザイン入門」受講終了時点でのCAVT得点を、「キャリアデザイン応用」受講有無別に平均点を集計した結果である。因果効果としては逆になるが、記述的な分布をみるだけであれば十分であろう。これらを見ると、キャリア意識について単純に高低を論じることは、あまり意味を持たないことがわかる。ビジョン得点については、2時点目に低いほうが、「キャリアデザイン応用」を受講している傾向がある。平均値差の検定を行うと、ビジョン得点については5%水準で有意であった。アクション得点は有意な結果にはならず、

表3 キャリアデザイン応用継続受講に関するクロス表

	入門のみ 受講	継続受講	N
【性別】			
女性	83.79%	16.21%	1203
男性	85.22%	14.78%	1380
【学年】			
1年生	79.48%	20.52%	1930
2年生	99.59%	0.41%	485
3年生	99.22%	0.78%	128
4年生	100.00%	0.00%	40
【学部】			
キャリアデザイン学部	69.09%	30.91%	55
グローバル教養学部	20.59%	79.41%	34
スポーツ健康学部	100.00%	0.00%	224
経営学部	56.51%	43.49%	292
経済学部	99.76%	0.24%	424
現代福祉学部	100.00%	0.00%	304
国際文化学部	80.70%	19.30%	57
社会学部	100.00%	0.00%	690
人間環境学部	50.35%	49.65%	143
文学部	54.25%	45.75%	153
法学部	63.77%	36.23%	207
【志望度】			
第一志望	83.82%	16.18%	1459
第二志望	84.25%	15.75%	584
第三志望以降	86.85%	13.15%	540

継続的な受講との関係は必ずしも明確ではないが、ビジョン得点が低い学生のほうが受講しているというのにはある意味、キャリア展望が十分に持つことのできていない学生が、追加的に「キャリアデザイン応用」を受講している、という傾向が存在するものと考えられる。継続受講は必ずしも「成果があった」と実感しているから行われているわけではなく、むしろ「まだまだ足りない」と思った学生が科目履修を行っているのではないかと推測される結果である。

それでは、これらの要因を考慮し、また、学部別の偏りも補正した場合にどのような結果が見られるだろうか。表3の結果からケース数が少ない、

表4 継続受講有無×各種スコア

	入門のみ 受講	継続 受講	有意 水準
ビジョン得点	20.709	19.814	*
ビジョン得点_SD	5.451	5.684	
アクション得点	21.277	20.918	
アクション得点_SD	5.021	5.028	
N	1647	279	
2022年夏学期GPA	2.683	2.699	
2022年夏学期GPA_SD	0.677	0.707	
キャリアデザイン入門評点	3.052	3.141	+
キャリアデザイン入門評点_SD	0.862	0.917	
N	2184	399	

注 1. + p<0.1 * p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

または継続受講が極端に少ないカテゴリを合併して、改めて分析を行った結果は表5である。表5の推定に際しては、学部別男女割合をウェイト値にしている。結果を概観しよう。

第一に、様々な要因を統制し、ウェイト補正を行うと、3年生のほうが継続受講している傾向にもある。インターンの選考や就職活動の真っ最中

表5 継続受講に関するプロビットモデル

	AMPE	b	s.e.
定数項	-	0.838	0.104***
男性	0.010	0.082	0.030***
学年(基準:1年生)			
2年生	0.002	0.012	0.162
3年生	0.095	0.811	0.173***
4年生以上	-0.137	-5.206	28.367
多摩キャンパス	-0.368	-3.110	0.124***
キャリアデザイン入門成績	-0.007	-0.053	0.019**
2022年夏学期GPA	-0.029	-0.254	0.026***
キャリアデザイン入門受講後アクション得点	-0.002	-0.021	0.004***
キャリアデザイン入門受講後ビジョン得点	0.000	0.006	0.004
受講前後アクション得点変化率	0.043	0.386	0.057***
受講前後ビジョン得点変化率	-0.015	-0.151	0.042**
N		1924	
AIC		11378.51	
BIC		11445.26	

注 1. + p<0.1 * p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

であるため、即時的な対策を求めての受講かもしれないが、オーソドックスな結果と言えるだろう。

第二に、多摩キャンパスダミーの効果の大きさである。平均限界確率効果 (AMPE) が -37.3% と非常に大きな効果を持っている。これは、キャンパス所在地といった制度的な障壁が受講にあたって大きい要素であるという、ある意味当然の結果を示している。特定の大学であれば、このような要因をコントロールしながら解釈することも可能であろうが、全国データを用いた場合は出身大学の制度的・物理的障壁についても考慮することが必要になる。単純に所属学部がなんらかのキャリア意識に対する志向性を有しているという代理指標としてみならず、明らかに制度的要因のほうが大きいことを示唆する結果である。このように特定の大学のデータであることから、具体的な解釈は可能になるが、全国データを用いる場合には可能な限り、大学を識別できる調査設計が必要とされるとも言えるだろう。

第三に、統制変数でしかなかった成績について、表4とは異なり、「キャリアデザイン入門」の成績が高いほど、また、2022年度夏学期 GPA が高いほど、「キャリアデザイン応用」を受講しなくなっているという結果が有意である。AMPE はどちらも小さな値であり押し下げ効果は弱いものの、評点が高いほど受講しないという結果は注目に値する。先に論じた通り、「成果があった」と感じている学生ほど、継続受講しないのではないかと考えられる。

第四に、やはり CAVT 得点の伸びと水準では効果が異なることがわかる。表4の結果とは異なり、第2期のアクション得点というキャリア意識の「水準」が高い学生ほど、また「キャリアデザイン入門」でのビジョン得点の変化率が高い学生ほど受講していない一方で、アクション得点の変化率が高くなるほど、すなわち「キャリアデザイン入門」の受講前後で行動意欲の「伸び方」が高い学生ほど、継続受講している。

以上の結果からわかることは「学部別の制度的な要因を考慮したとしても、初期のキャリア教育

科目の成果が『高い』と考えられる学生ほど、実は後のキャリア教育科目を受講しない」という傾向があると考えられる。もちろん、アクション得点の「伸び」を教育成果が「高い」と考えるのであれば、そのような学生は継続的な受講につながっている。一方で、受講後の CAVT 得点が高い学生ほど、継続受講しないというのは言い換えれば、「十分な成果が出た」と考えている学生ほど、受講しない、と言えるのである。また、ビジョン得点の「伸び率」が高い学生ほど受講していない、ということも、「十分な見通しを得た」という実感のある学生ほど、自身の見通しに沿った行動に移しているとも、もしくは日頃の学生生活に注力しているとも考えられる。見方にもよるが、キャリア教育科目の累積的な効果は、補償教育としての側面が強くなるのではないかと考えられる。

(2)「キャリアデザイン入門」受講の有無による「キャリアデザイン応用」の受講効果

前項では、「キャリアデザイン入門」受講者の中から、誰が継続的に「キャリアデザイン応用」を受講するのかを確認した。プロビットモデルでの推定によれば、「キャリアデザイン入門」の成績がよく、受講後のビジョン得点の上昇率が高いほど受講せず、一方で、アクションの得点の上昇率が高いほど受講することがわかった。言い換えれば、「あまりキャリア意識は高くなかったが、ほどほどに高くなった学生」が継続受講している傾向が見られるとも言える。そこで、このような受講者像を背景に、「キャリアデザイン応用」を受講することによって、どのようにキャリア意識や行動が変化するかを見よう。言い換えれば、累積的なキャリア教育科目受講の効果はどのように現れるのかを明らかにするとも言える。

本節で用いるデータセットは前節と異なり、「キャリアデザイン応用」受講者の学籍番号から、「キャリアデザイン入門」受講者をマッチングさせたものである。したがって、総ケース数は当然ながら変動するため、ウェイト値も再作成してい

表6 基本統計量

	平均値	標準偏差	N		平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差	N	
入門受講	0.420	-	958	外部・学力試験	0.486	-	958	キャリアデザイン 応用評点	3.240	1.070	958
脱落	0.280	-	958	指定校	0.188	-	958	2022年度秋学期 GPA	2.440	0.730	958
男性	0.480	-	958	付属校	0.178	-	958	ビジョン得点_応用 _1時点目	19.100	6.050	915
女性	0.520	-	958	スポーツ推薦	0.066	-	958	ビジョン得点_応用 _1時点目	20.370	5.240	915
1年生	0.716	-	958	留学生入試	0.007	-	958	ビジョン得点_応用 _2時点目	19.980	5.490	729
2年生	0.186	-	958	入試経路その他	0.074	-	958	ビジョン得点_応用 _2時点目	21.110	4.870	729
3年生	0.064	-	958	第一志望	0.571	-	958				
4年生以上	0.034	-	958	第二志望	0.239	-	958				
多摩キャンパス	0.008	-	958	第三志望以降	0.190	-	958				

る。これらの基本統計量をまとめたものが表6になる。

具体的な結果の確認に移ろう。まず、「キャリアデザイン応用」受講者の中での、2回分のCAVT得点の収集に応じなかった学生、つまり脱落者の推定を行う。まず、表7でどのような学生が「キャリアデザイン応用」でアンケート回答に脱落しているのだろうかを確認する。表7は各種の属性変数と回答有無とのクロス集計表である。ただし、瀬戸他（2023）と異なり、特定の属性では回答者が極端に少ないといった特徴があるため、一部の変数は合併している。例えば、学部別集計はケース数の問題から表5の推定同様、多摩キャンパスか市ヶ谷キャンパスいずれに所在しているかでカテゴリカル変数を再作成している。また、アンケートの脱落について、「キャリアデザイン応用」の受講後のみならず、受講前にも回答が欠損でしている回答者が見られたため、受講中・受講後いずれの時点でせよ回答していない回答者を「脱落」と定義し、双方に回答した回答者を「両方回答」と定義した。表7の結果を瀬戸他（2023）と比較すると、それほど大きく傾向が異なることがわかる。もちろん、脱落の水準こそ違いは存在するが、概ね、変数間の傾向

については類似していると言ってよいだろう。

それでは、このような傾向は多変量解析ではどのような構造が見出されるだろうか。表8は「キャリアデザイン応用」での脱落者を推定する二項プロビットモデルの推定結果である⁴⁾。

表8の結果を見ると、少々意外な結果がわかる。

表7 「キャリアデザイン応用」での回答脱落に関するクロス表

	両方回答	脱落	N
【性別】			
女性	73.65%	26.35%	501
男性	69.37%	30.63%	457
【学年】			
1年生	68.95%	31.05%	686
2年生	79.78%	20.22%	178
3年生	72.13%	27.87%	61
4年生以上	81.82%	18.18%	33
【学部】			
市ヶ谷キャンパス	71.47%	28.53%	950
多摩キャンパス	87.50%	12.50%	8
【志望度】			
第一志望	70.57%	29.43%	547
第二志望	71.62%	28.38%	229
第三志望以降	74.73%	25.27%	182

表8 「キャリアデザイン応用」での脱落傾向に関するプロビットモデル⁵⁾

	AMPE	b	s.e.
定数項	-	0.958	0.054 ***
男性ダミー	0.008	0.028	0.023
学年(基準:1年生)			
2年生	-0.032	-0.105	0.028 ***
3年生	-0.122	-0.442	0.043 ***
4年生以上	-0.157	-0.605	0.065 ***
志望度(基準:第一志望)			
第二志望	-0.110	-0.389	0.038 ***
第三志望以降	-0.006	-0.019	0.039
入試経路(基準:一般入試)			
指定校推薦	0.034	0.113	0.038 **
付属校進学	0.080	0.259	0.042 ***
スポーツ推薦	0.018	0.061	0.050
留学生入試	-0.137	-0.586	0.191 **
その他	0.052	0.173	0.049 ***
2022年度秋学期GPA	-0.156	-0.517	0.020 ***
キャリアデザイン応用成績	-0.027	-0.091	0.012 ***
N		958	
AIC		17994.56	
BIC		18062.67	

概ね、多くの変数が有意であるので特徴的な部分に着目すると、2022年度秋学期GPAとキャリアデザイン応用の成績が負の効果を持っており、この結果は瀬戸他(2023)での結果とも真逆である。時点の問題を考えると、脱落が先とも言える要素もあるので、因果というよりは関連という視点でこれを見てみると、脱落しているがために、秋学期のGPAが高くなるという傾向は少々考え難いであろう。「キャリアデザイン応用」の成績に関しても同様である。これらの結果は「真面目さ」という交絡因子が存在しているという先行研究の知見(二宮 2022)と異なることを示唆する。推測になるが、ヒントは表5にあるだろう。「キャリアデザイン応用」の科目内容は前述の通り、業界分析などやや高度な技法の教授に力点が置かれた対面授業である。ここでアクション得点の高い学生ほど、受講しなかったという傾向を考慮す

ると、業界分析などを「わざわざ習う必要がない」学生ほど、回答から離脱していると言える。すなわち、アクション得点が高いほど、アルバイトもベンチャー企業でのアルバイトなど、時給以外の要素も考慮した学外での活動に参加している可能性が推測できる。それほど高度でなくとも、経済誌を読むなどの活動を行っている可能性があるだろう。そのような学生ほど、「キャリアデザイン応用」の教授内容について「物足りない」と思った結果、CAVT得点測定時に欠席している、または講義自体へのコミットメントが低くなり、測定時に脱落しているのではないだろうか。いずれにせよ、「キャリアデザイン応用」に関しては、「キャリアデザイン基礎」と異なる傾向が伺える⁶⁾。

それでは、ここで求められた脱落確率の逆確率を重み付けにして「キャリアデザイン応用」の受講効果を探索的に見てみよう。図1は受講有無×時点間でのCAVT得点の推移を、ビジョン得点、アクション得点ごとにプロットしたものである。これを見ると興味深いことがわかる。「キャリアデザイン入門」から継続的に受講するか否かによって、ビジョン得点もアクション得点もほとんど差が観察されないのである。よく見ると微細な差は存在するものの、明瞭な差とは言い難いような違いである。言い換えるならば、「累積的なキャリア教育科目受講の効果は明確には確認できない、むしろ大きな違いはない」と言っても差し支えない水準である。

さらに細かく属性別に見ていこう。学年は就職活動までのリードタイムの代理変数であると考えられること、性別によってキャリアの見通しがことなると考えられるため、性別と学年という基本ながらも重要な属性変数ごとに、その効果を見ることにする。ただし、3年生以上は受講者も少ないことから、2年生までのデータで学年別に傾向を確認する。

性別について見てみよう。図2と図3は男性・女性それぞれのCAVT得点の推移である。こちらもそれほど大きな違いではないが、男女で見る

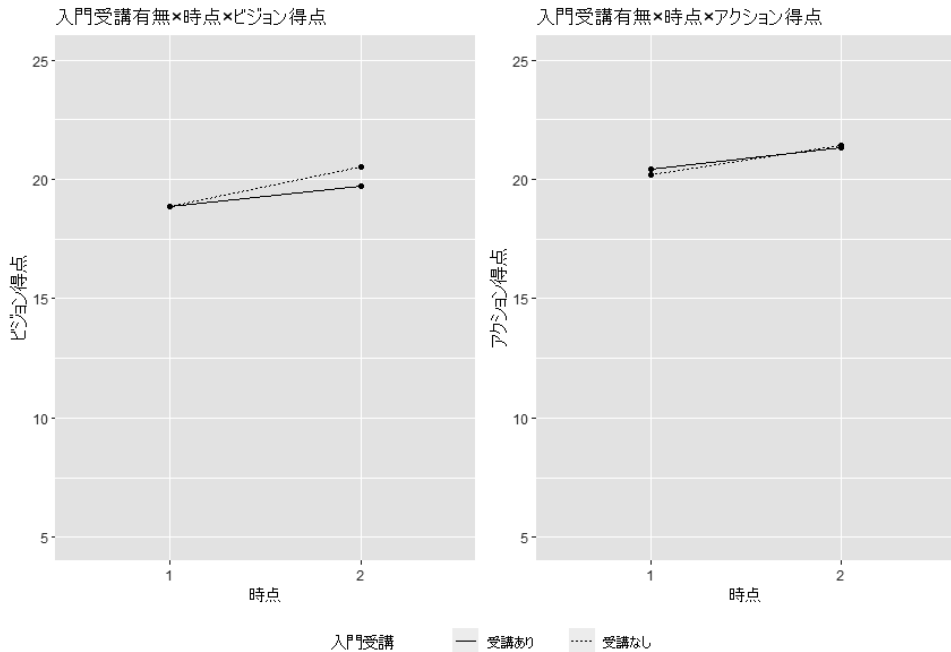


図1 「キャリアデザイン入門」受講有無×時点別 CAVT 得点の推移

と少々、相違が見てくる。男性について言及すると、ビジョン得点・アクション得点いずれも「キャリアデザイン入門」を受講していなかったほうが高いのであり、この傾向は受講前後によって逆転することはない。すなわち、「キャリアデザイン入門」を受講せずに「キャリアデザイン応用」を受講するほうが、CAVT 得点が受講前から受講後まで、一貫して高いと言えるのである。

一方で、女性に関しては、全体と変わらないかオーソドックスな結果である。「キャリアデザイン入門」から継続受講している学生のほうが、アクション得点は高く、ビジョン得点に関しても全体とそれほど傾向は変わらない。やや継続受講していない「受講なし」のほうが傾きは急であるぐらいである。これらの結果から、たしかに基礎受講有無の効果は性別によって非対称的であるが、性別ごとに見た場合、効果はそれほど大きいとは言い難いと言える。むしろ、かなり小さいと言っても差し支えないだろう。ではなぜ、このような傾向が生じるのだろうか。参考に、表5で有意だったアクション得点とビジョン得点の変化率について、

性別との交互作用項をとると、ビジョン得点の変化率の交互作用は有意ではなく、アクション得点変化率の交互作用は有意であった（男性×アクション得点変化率： $B = -0.272, s.e.=0.094$ ）。この傾向をもとに考察すると、ビジョン得点やビジョン得点の変化率は男女で異なった効果はないが、アクション得点変化率が大きくなるほど、より男性では継続受講しなくなる。つまり、男性では女性と比べてもよりアクション得点が低く、その伸び率は比較的低い学生が、「キャリアデザイン応用」を受講しているものと考えられる。言い換えれば、キャリアの見通しをより持つことができたと実感感が乏しく、行動にもなかなか移せていないものの、なにかしらの行動を起こさねばならないという意識のある学生、特に男性は、補償教育的な側面を求めて継続的に受講しているという可能性が示唆される。その結果、「キャリアデザイン応用」受講時点では、相対的にキャリア意識の低い層が多く継続受講する結果、図2のような結果になるのだろうか。ただし、表5の回帰係数や平均限界確率効果を見ても、それは大きな影

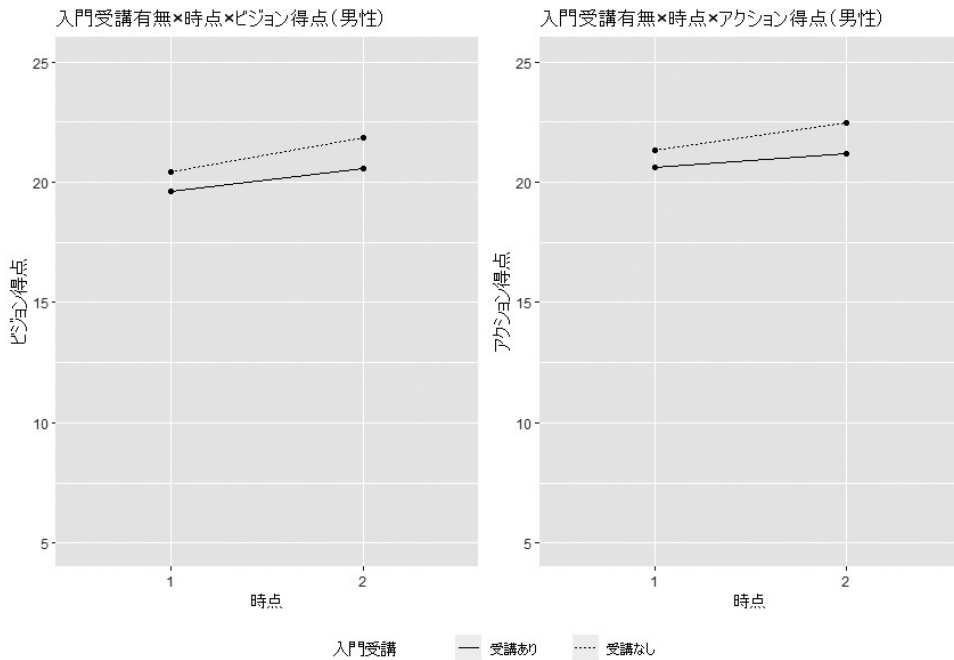


図2 「キャリアデザイン入門」受講有無×時点別 CAVT 得点の推移 (男性)

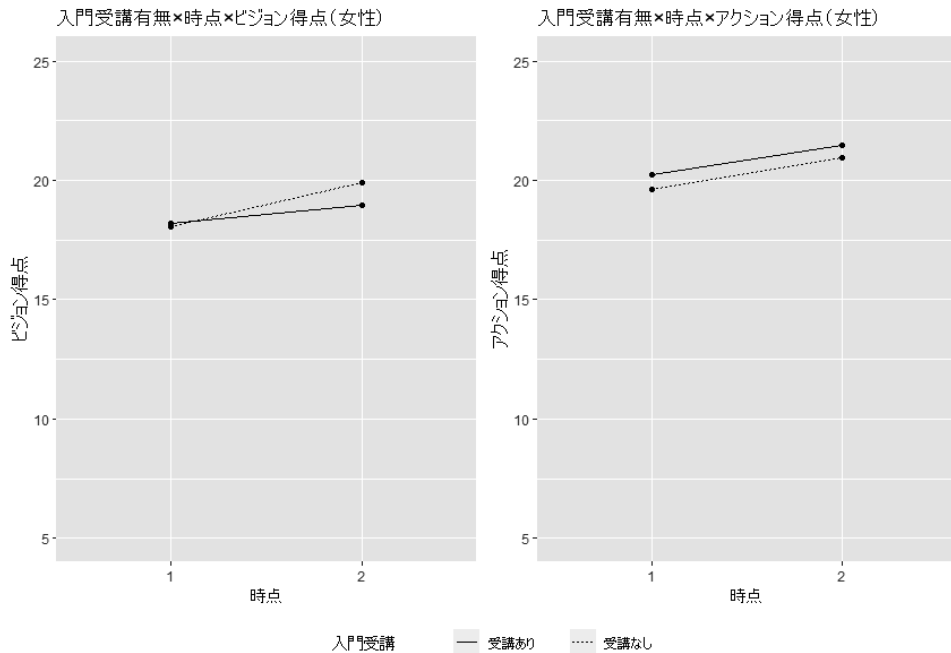


図3 「キャリアデザイン入門」受講有無×時点別 CAVT 得点の推移 (女性)

響を及ぼすものではない。これが反映され、図2から図3のような結果になっているのではないかと推測される。

では、学年ではどのような推移をたどるだろうか。特に人数の多い1年生(図4)と2年生(図5)に着目して分析する。学年で見ると、1年生と2

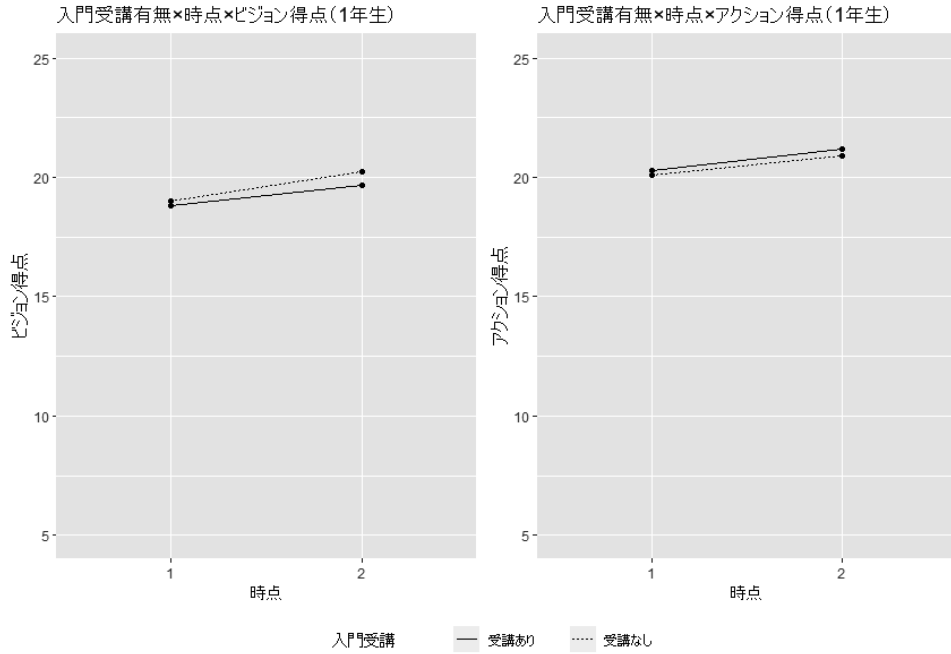


図4 「キャリアデザイン入門」受講有無×時点別 CAVT 得点の推移（1年生）

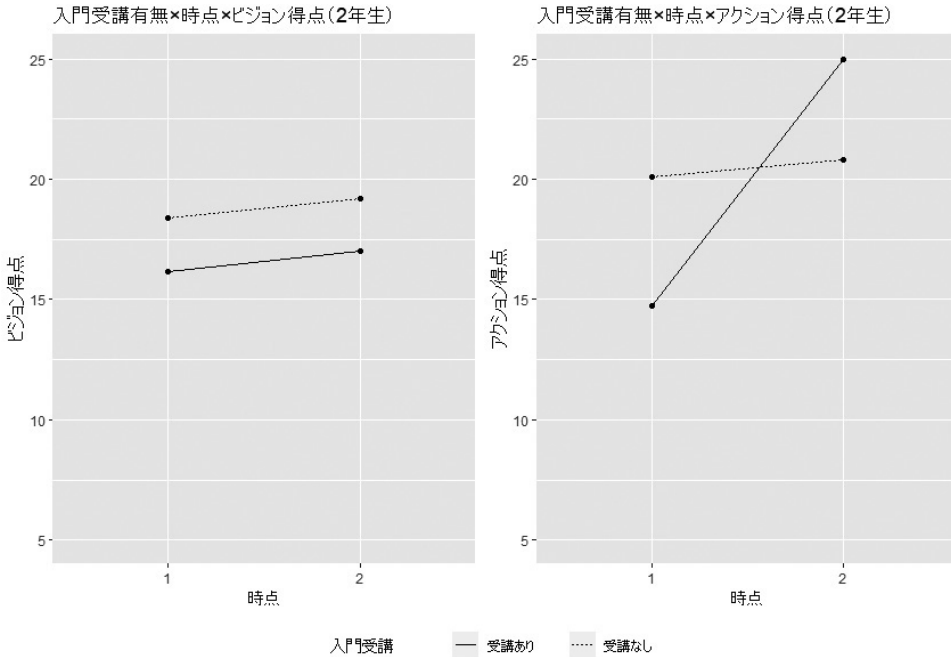


図5 「キャリアデザイン入門」受講有無×時点別 CAVT 得点の推移（2年生）

年生で異なる動きをしていることがわかる。1年生に関して言及すれば、全体の平均的な動向とほぼ同じ動きをしていることがわかる。サンプルの

多くが1年生であることを考慮しても、妥当であると言えるだろう。

これに対して、2年生は特徴的である。それは、

2年生のビジョン得点は、たしかに、継続受講の有無にかかわらず伸びているが、その傾きは両グループでそれほど差が見いだせない水準である。また、男性と同様、継続受講者のほうがビジョン得点は低い。ところが、アクション得点は異なった動き、すなわち得点の上昇が異質であり、継続受講者のほうが急激なのである。しかも、受講後には未受講者である「受講なし」をアクション得点は上回っている。それでは、なぜこのような特徴的な動きをしているのであろうか。一つは受講時期からの解釈である。2年生は就職活動の最中ではないが、翌年に就職活動が迫っているという、時間的切迫感には1年生に比べても大きいだろう。したがって、自分の希望する業界や職種についてある種、「決めなければいけない」という切迫感がより存在することが考えられる。つまり、なにか自身のキャリア形成について見通しを得たいと思っているが、その一方で、「キャリアデザイン入門」から継続して受講することで、一種の情報過多状態になってしまっている、ということが推測される。しかしながら、一方で上述のような切迫感があるため、「とりあえずなにかしなければいけない」という切迫感もまた生じていると推測される。この結果、「なんとなく見通しを得た」というような実感を得つつも、それよりも「急いで準備に移さなければならない」という切迫感を、継続受講者は感じているのではないだろうか。

これらを考慮すると、ある種、2年生ほど「焦って」受講した結果、会社や業界の分析方法といった「就職活動におけるタスクの概要と遂行方法」については十分な知識を得ることができた。しかし、その逆で「焦った」結果、自己分析などの「やりたいこと」信仰が過剰に増幅され、なにかわからないが「やりたいこと」を探して「就職活動」をしなければいけないという、目標の見えない就職活動に水路づけされている可能性が指摘できる。このような構図はかつて、「やりたいこと」とフリーター就職に関して、同様に見られた構図(久木元 2003)と類似のものであろう。しかし、学部1年生ではこのような特徴的な動きは見られ

ない。つまり、キャリア教育科目が、目標の見えない「やりたいこと」を探させる就職活動に水路づけさせるか、業界の特徴と自身の職業的パーソナリティを抑えた「手堅い」就職活動に水路づけするか否かは、受講する学年によってその効果の向きが異なる可能性が指摘できるのである。瀬戸他(2023:75)では、「キャリア科目の効果については、『なんとなく意識はしているが具体的な活動には結びついていない』という層に特に効果的」である可能性について指摘していたが、少なくとも累積的なキャリア教育科目の効果に関しては、見通しを持つことよりも、行動が先立ってしまう、という可能性が指摘できるのである。少なくともこの結果は、キャリア形成支援という点ではどこかで学生のキャリア意識を省察的に見直しさせる機会が必要であることを物語る。

4 結論

本稿では、キャリア教育科目の発展科目への継続的な受講がいかなる要因に規定されるのか、また、継続的なキャリア教育科目の受講の効果によって、キャリア意識の推移がどのように異なっているのかを実証的に検討した。その結果は以下のように要約できる。

第一に、セルフセレクションの主要な要因と考えられるキャリア意識について、行動に移す度合いのアクション得点の高さはむしろ、継続的な受講に結びつかなかった。キャリアの見通しに関するビジョン得点の変化率も同様である。これと逆に、アクション得点の上昇率は継続的なキャリア教育科目の受講に結びついていた。このことは、キャリア教育科目の受講に対して、単純のキャリア意識の高低だけで論じることが困難であることを示唆する。

第二に、継続的な受講がキャリア意識の推移に与える影響は、継続的な受講の有無にかかわらず、明確には観察されない。言い換えれば、累積的な教育効果の存在を肯定的に実証できたとは言いがたい。しかし、キャリア意識の推移は属性ごとに若

干の異質性が存在する。特に2年生では、キャリアの見通しの伸び方よりも、何らかの行動に移そうとする意識の伸びのほうが、継続受講者に顕著に確認された。この結果は、見通しや意識よりも行動に作用し、キャリア教育科目の追加的な受講は見通しを得ることが行動に移すことに迫っていない側面があることを示唆する結果である。

一方で、本稿の課題についても言及する。第一に、「キャリアデザイン応用」の未受講者のCAVT得点を測定していないため、「キャリアデザイン入門」を受講したが「キャリアデザイン応用」を受講しなかった学生のCAVT得点の推移については十分に明らかではない。未受講者との比較を含めたキャリア教育の継続的な受講の効果を観察する必要はあるだろう。

第二に、継続的なキャリア教育の受講がなぜ、属性によって異なる効果が観察されるかの検証をより詳細に行う必要がある。キャリア教育の継続的な受講によるものなのか、継続的な受講をする学生の性格によるのかは議論の余地がある。

第三に、これらのキャリア教育科目の効果が就職活動や就職先決定に及ぼす経路である。現在までのところ、CAVT得点の推移でしかないため、最終的にいかなる就職活動の行動の差に結実するかを明らかにする必要がある。

このような点について、引き続きの解明が求められるだろう。

注

- 1) キャリア・アクション・ビジョン・テスト (CAVT) とは、キャリア意識を測定する尺度である。アクション得点、ビジョン得点の2因子から構成されており、5件法を用いて測定している。アクション得点は、「学外のような活動に熱心に取り組む」「尊敬する人に会える場に積極的に参加する」「人生に役立つスキルを身につける」といった行動に関する6項目から構成されている。「ビジョン得点は「将来のビジョンを明確にする。」「将来、具体的に何をやりたいかを見つける」「自分が本当にやりたいことを見つける」などの意識に関する6項目から構成されている。尺

度の詳細については、下村・八幡・梅崎・田澤（2013）を参照されたい。

- 2) 平均値差の推移を分析するのに、本稿のようなデザインであれば、ウェイトつきで一要因対応あり分散分析を行うということも考えられる。しかし、本稿が利用したRのaov関数で一要因対応あり分散分析を行う場合、ウェイトを利用した分析は必ずしも妥当な結果を出力しない、という指摘もあったため見送った（R Core Team 2022）。
- 3) GPAの計算は、瀬戸他（2023）同様に、半期22単位科目登録をしているという仮定をおいて、「2020年度春学期 GPA 素点×22-キャリアデザイン入門の評価点/20」で算出した。
- 4) プロビットモデルについて、ウェイト補正をかけた上で推定しようとした場合、瀬戸他（2023）同様にプロビットモデルが収束しなかった。ケース数の少ない「多摩キャンパスダミー」を除外し、推定を行ったところ、モデルが収束した。これとは別に、各学部をダミー変数にした場合でもプロビットモデルが収束した。しかし、脱落の逆確率を求めたところ、学部定員を大きく上回るような極端なウェイト値が算出されるケースが出た。これらを考慮し、最終的にはキャンパス所在地のダミー変数を投入しないモデルで表8の推定を行っている。この点は瀬戸他（2023）とは異なり、一部の変数を除外して推定した場合に収束したため、ウェイト値を利用している。
- 5) 可能であれば、2022年度夏学期GPAを用いた推定を行うべきであるが、データセットに含まれなかったため、2022年度秋学期GPAを用いている。
- 6) ウェイトなしの推定も行ったが、同様の結果であった（2022年秋学期GPA: $B = -0.425$, $s.e. = 0.081$ 、キャリアデザイン応用成績: $B = -0.163$, $s.e. = 0.049$ ）。

参考文献または引用文献

- 平尾智隆（2019）「自然実験によるキャリア教育の効果測定—キャリア教育が大学生のキャリア意識に与える影響」『日本労働研究雑誌』No. 707, pp.79-92.
- 法政大学後援会（2022）『会員のための大学ガイドブック』<https://www.hosei-koenkai.org/templates/guidebook/2022/all.pdf> 2024年2

月28日閲覧.

葛城浩一 (2007) 「誰が『キャリア教育』を受けるのか」
『大学論集』39号, pp.319-334.

久木元真吾 (2003) 「『やりたいこと』という論理—フ
リーターの語りとその意図せざる帰結」『ソシオロジ』
48巻2号, pp.73-89.

宮田弘一 (2020) 「キャリア教育の効果に関する実証
的分析—傾向スコア分析を用いて」『広島大学大
学院人間社会科学研究所紀要』1号, pp.741-
749.

二宮祐 (2022) 「若者パネル調査におけるサンプル脱
落—「学校通し」とインターネットモニターとの比較—」
『大学経営政策研究』12巻 pp. 293-308.

R Core Team (2022) R: A language and
environment for statistical computing. R
Foundation for
Statistical Computing, Vienna. [https://cran.
r-project.org/doc/manuals/r-release/
fullrefman.pdf](https://cran.r-project.org/doc/manuals/r-release/fullrefman.pdf) 2024年1月20日閲覧.

下村英雄・八幡成美・梅崎修・田澤実 (2013) 「キャ
リア意識の測定テスト (CATV) の開発」梅崎
修・田澤実 (編) 「大学生の学びとキャリア—入学
前から卒業までの継続調査」法政大学出版局 pp.
17-46.

瀬戸健太郎・田澤実・梅崎修・武石恵美子・坂爪洋
美 (2023) 「キャリアセンターが提供するキャリア教
育科目の効果測定—CAVT を用いた検討」『法
政大学キャリアデザイン紀要』Vol.20, No.2, pp.69-
81.

Influences on Advanced Course Enrollment and Career Consciousness in University Students

SETO Kentaro
UMEZAKI Osamu
TAZAWA Minoru

This study had two objectives related to career education courses offered by university career centers. First, it aimed to identify the factors influencing students' decisions to enroll in advanced courses after completing introductory courses. Second, it investigated the impact of enrolling in both types of courses on students' career consciousness. The target university's career center divided career education courses into introductory and advanced courses. The subjects of this study were students enrolled in these courses, with their career consciousness measured using the CAVT scale, which includes two factors: action and vision. Study 1 used a binary probit model weighted by cross-section weights to estimate the dropout probability and identify students who continued to enroll in advanced courses after completing introductory courses. The results showed a tendency for students with a

higher rate of increase in action scores due to taking introductory courses to enroll in advanced courses. However, students with good grades in introductory courses and high action scores were less likely to enroll in advanced courses. Study 2 evaluated the cumulative effect of enrolling in introductory and advanced courses on career consciousness (action and vision scores). The findings indicated that enrolling in both courses improved action scores while having little or no negative impact on vision scores. This trend was particularly pronounced among males and sophomores. Ultimately, the study suggested that college students' repeated enrollment in career education courses leads to confusion due to information overload and potential hindrance to action rather than to a linear and cumulative formation of career consciousness and behavior.